

歌舞伎の中の巡礼

河合 真澄（大阪府立大学人間社会システム科学研究科教授）

Pilgrimage within Kabuki

Masumi KAWAI

**Professor, Graduate School of Humanities and Sustainable System,
Osaka Prefecture University**

In Kabuki there are many scenes that depict pilgrimages such as the Shikoku pilgrimage. The scenes from these performances can be seen in Eiri Kyogenbon (illustrated story line books) and Ezukushi (outline books with a focus on illustrations) as well as from the written text in Eiri Kyogenbon and Daicho (scripts). One Eiri Kyogenbon that has Shikoku pilgrimage in its title is "Shikoku Henro" (first performed in 1691), and books in which the Saikoku pilgrimage is depicted include "Keisei Ariwaradera" (first performed in 1702), "Keisei Nishiki-no-Ubuginu" (first performed in 1716) and "Nariai Kannon-no-engi" (the history of Nariaikannon) (first performed in 1719). Among the illustrations are pilgrims wearing oizuru (white vests) as well as very strange scenes such as a cow wearing an oizuru and making the pilgrimage with some people.

Scripts that still remain and are easy to understand include "Shippei Tarou Kaidanki" (first performed in 1762), which has a description of the hut of Shinnen (d.1691) - a free place to stay along the Shikoku pilgrimage route. As well "Igagoe Norikakegappa" (first performed in 1776) and "Kinmon Gosannokiri" (first performed in 1778) show a person dressed as a Saikoku pilgrim. "Shippei Tarou Kaidanki" also contains a very interesting scene of an inspection tour coming from Mt. Koya to the hut of Shinnen. People in pilgrimage attire can be seen not only in Ezukushi, but they are also largely depicted in Eiri Nehon (illustrated scripts) and thus, one can understand when the pilgrimage attire became standard. Although it is difficult to determine whether or not the pilgrimage scenes in Kabuki are exactly like the actual pilgrimages, it is important to include the information provided in plays about pilgrimage to widen our views on such research.

はじめに

歌舞伎には、四国遍路などの巡礼が登場する演目が多く存在している。その上演のありさまは、絵入狂言本（挿絵入りのあらすじ本）や絵づくし（挿絵を中心とする筋書き本）、絵入根本（挿絵入りの脚本）の挿絵に描かれており、舞台における巡礼の身なり等が画像資料から判明する。また、絵入狂言本や台帳（脚本）の本文にも記載があり、そこからも衣装等について窺うことができる。

A. 絵入狂言本

1、『四国辻路』元禄4年（1691）9月、京都、都万太夫座初演

この作品についてはすでに述べたことがあるが（「近世演劇における四国遍路と巡礼」平成13年度愛媛大学公開講座プロシーディング『四国遍路と世界の巡礼』、2001年12月）、まさに四国遍路そのものを題材とした作品である。

絵入狂言本には、次の口上が掲載されている。

座本山下半左衛門口上

扱、お断りを申します。四国辻路の義は、奇特多きことでござります。私存じました者、この夏より四国をめぐり、初秋の時分に下向仕りましたが、四国辻路の順礼が現に利生を受け、奇特のござりましたを見て

参り、則ち名ところ書付け帰りましたを、則ち三番続に取組み仕ります。今までの狂言と違い、誠多きことにて候間、扱はあの様なことがあったかと思し召せば、一入お慰みも増すなれば、左様に思し召し御見物頼み上げます。

座本山下半左衛門の口上には、知人が目撃した四国遍路の奇瑞を「三番縋^{さんばんつづき}」（三幕からなる演目）としたことが書かれていて、親子三人の四国遍路の姿が挿絵にある【図1】。同様の巡礼姿は、本文中の挿絵にも見られる。

2、『けいせい在原寺』（元禄15年・1702）二の替り、京都、夷屋松太夫座初演

西国巡礼の登場する作品であり、〈上之巻〉は三室戸寺（西国三十三所第十番札所）の巡礼歌を歌う場面から始まる。

順礼歌 上もすがら目をみむると分け行けば 宇治の川瀬に立つは白波

姫初瀬の前乗物に召し、桜井つぼね、腰元数多、皆笈摺をかけ給ひ、供人引具し西国順礼なされつつ、都路へ入り給ふ。(中略)

男、二十ばかりの娘と五つばかりの娘の子を連れ、順礼姿にて来たり、「私どもは人を尋ねて順礼を致す者でござんす。(中略) ご存じの方はお知らせなされて下されませ」と申せば、(中略) 初瀬の前乗物より出給ひ、「(中略) して、あの順礼衆は何人ぞ」。男罷り出「私は惣兵衛と申す百姓でござりますが、この二人の娘の母が家出を致しましたゆえ、それを尋ねに出、順礼をいたします。則ち私が女房でござります。」(中略) 局聞き「お姫様も云名付の殿御さまの行方が知れいで、順礼なさる」。 〈上之巻〉

〈上之卷〉

この場面では、人探しのために二組の巡礼たちが遭遇する。諸国を遍歴する巡礼は、人探しの旅の手段として使われている。挿絵には、姫君と腰元二人、それと出会った二人の男女が笈摺を着た巡礼姿で描かれている。姫君と腰元二人は、胸に納札を掛けている【図2】。

3、『けいせい錦産衣』(正徳6年・1716)二の替り、京都、早雲長太夫座初演

殺される場面が挿絵にある【図3】

然るところへ尼の順礼報謝に来たれば、国姫内へ呼び入れ國を問へば

〈由之卷〉

4 『成相観音縁起』(享保4年・1719初演) 三の替り以降 京都 蛭子屋吉郎兵衛座初演

この作品は、兄妹と子供の三人連れの西国順礼が登場し、牛の子にも笈摺を掛けて成相觀音に到着するところから、『上之巻』の話が始まる（成相寺は西国三十三所第二十八番札所）。

浪の彦松の響きも成相に　風吹き渡る玉橋立

ここに信濃の国柳田村の百姓に、庄次郎とてありけるが、妹おさん、同子お長を連れ、我が身は牛の子を引き、西国順礼と心ざし、この成相に着きにはる（由略）

局人々に向かい、「そなた衆の様子を見るに、何さま卑しからぬ人と見えた。又牛の子に笈摺をかけて連れられたは、何とぞ様子があるであらう、聞きたい」（中略） 〈上之巻〉

挿絵には、笈摺を身につけた巡礼の姿が描かれ、牛に笈摺を着せて共に巡礼をしている奇抜な趣向も見られる【図4】。この牛の子は、次に引く後の部分では姫君の身替りとなり、観音の靈験が頼われることになる

奥より姫君駆け出給ふ。有馬之介不審に思ひ、乗物の戸を開くれば、順礼したる牛の子なり。(中略)「まさしくこれは觀音のお身替りと見えたり。扱有難し、この上は、重ねて西国順礼をさせ、御礼申させませうまづめでたしめでたし」
（上之巻）

B. 台帳と絵づくし・絵入根本

歌舞伎の台帳は写本の脚本であり、挿絵はない。しかし、多くの場合同じ作品について絵づくしや絵入根本が出版されており、その挿絵には登場人物が描かれているため、実際に用いられた衣装等の手がかりとなる。また、せりふやト書きによって詳細な内容が明らかとなる。ただし、芝居ゆえの誇張や事実とは異なる内容が含まれている可能性がある。

5、『竹籠太郎怪談記』宝暦12年（1762）7月、大坂、角の芝居初演

四国遍路を扱う数少ない作品の一つであり、台帳には〈四つ目〉（四幕目）に四国遍路の報謝宿である真念庵の場面が組み込まれている。

絵づくしの挿絵には嶮岨な山が書き込まれていて、四国遍路が峻険な道を行く困難な道程をたどることが彷彿される【図5】。真念庵の内部も描かれているが、実際とはかなり異なるものと考えられる【図6】。

台帳の〈四つ目〉からいくつかの部分を抜き出して、この作品に見られる四国遍路の情報を見て行くこととする。

【ア】

作り物、寺の掛かり。正面戸間の間、真言宗の仏壇、本尊不動明王、弘法大師。前に護摩壇に仏具を飾り、真中に阿字の鏡、雲の台座に飾り直し置く。（中略）幕引く。と坊主式人真言の勤めしている。辺路の道者式三人、旅立ちの用意、杖、笠、草鞋、行李飯など支度している見え。（中略）

旅人皆々 南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、エエ有難い。

坊主二人 これや道者衆、皆立たっしやるか。

旅人 アア、昨夜からいかい御世話になりました。今朝とうから立たうと存じましたれど、長旅の疲れもあればゆるりと立たうと思うて、この通りでござりまする。

坊主口 それやもう勝手にさっしゃったがよい。道者に施しの庵なれば、何も遠慮することはござらんぞや。

旅人 忝うござりまする。

坊主〇 皆、峠山へかけるつもりなら、荷物をここに置いて行かっしゃれ。月山へかけるのなら、持つて行たがよい。

旅人 アイアイ、寺山院から伊予の觀自在寺までは何程ござりまするな。

坊主口 七里でござる。三里半行くと、松尾坂峠というて伊予、土佐の国境じや。そこの番所へ土佐の切手は収めて通らしやれや。

旅人 畏りました。

この部分から真念庵が遍路をする旅人の報謝宿となっていることがわかり、真念庵の僧侶たちが旅人に里程など遍路についての道案内をする様子が描写されている。

【イ】

坊主口 かててまして高野から四国八十八ヶ所を改めの役人はお出でなさる。寺は忙しいが、ちっと手伝うて下されんか。（中略）

岩〔円海〕 高野山の役人、かの織部殿が、今日は足摺から寺山院、近郷の寺方を改めにござって、留守でござる。しかしあつけお帰りでござらう程に、今しばらく待ってござれ。

ここには、真言宗の本山である高野山から巡檢使の役人が訪れ、近郷の寺も視察に回っていることが書かれている。

【ウ】

富〔きさかた〕 いや私は四国辺路でござりまするが、承り及んだ真念庵はこれでござりまするかな。（中略）

富〔きさかた〕 行き暮れた辺路には、報謝に宿をお貸しなさると、国を出まする時から聞いておりま

する。女の一人旅、後へも先へも行かれません。どうぞ一夜明かさして下さりませうなら忝う存じます。
(中略)

岩〔円海〕 ヤアア、何じゃ、十日も二十日も逗留せう。女の一人旅をその様に泊めておかうものかいの。
一夜も泊めることはならん。早う出て行て下され。(中略)

富〔きさかた〕 成程女の一人旅泊めることならんとおっしゃるは、重々御もっとも。

真念庵は報謝宿ではあるが、一人旅の女性の宿泊を断る様子が描かれている。断られた女性の方もすぐに納得しており、このような事実があったかもしれない(作品中では、円海はきさかたの敵であるため宿泊を断ったと考えられる)。

【エ】

富〔きさかた〕 今、金が壱両この散銭箱の中へ落ちたによって、ついちょっと蓋を取って出すのでござりまする。(中略)

岩〔円海〕 ハテ、これやこの庵の散銭箱で、講中寄って毎月晦日ならで開けることはならぬものを。

散銭箱(賽銭箱)は講中の者が毎月末日に開けることになっているとされる。これもあり得たことかと思われる。

【オ】

定〔織部〕 密法盛んの世の中、大師の行徳四海を潤せば、さして吟味致す事はござらねども、五年に一度、三年に一度は、高野山より四国八十八ヶ所は言うに及ばず、その外真言の寺々、法流を吟味するが先格。阿波、讃岐、伊予を改め、当国も今二三日でしまいでござりまする。(中略)

定〔織部〕 円海阿闍梨、夜前のお話に、何者か大師正筆の光明曼荼羅所持いたし、金子百両に売り扱ひたいと申してお頼み申したと承り、幸ひ拙者少し目利きを仕れば、御正筆に極まらば買ひ取り、高野山へ納めまするも大師への御奉公。俗家に置きまするは勿体ない。

高野山からの巡検使のせりふでは、三年に一度、あるいは五年に一度の巡検が行われ、八十八ヶ所の靈場のみならず真言宗の寺院等の監察を行うと語られる。また、巡検使は弘法大師正筆の曼荼羅の鑑定も行っている。

【カ】

富〔きさかた〕 緑之介様を何者やら殺したと聞いて、駆けつけ追つ詰めたれば、打ちかけた片しのかうがい。これを証拠に、四国辺路に事寄せ方々行方を尋ねたわいの。

このせりふによれば、きさかたは四国遍路にかこつけて敵を方々捜しまわっていた。歌舞伎の敵討物の作品の中には巡礼が登場することが多く、移動の自由を得る手段としての巡礼は、芝居の中に定着している。

6、『伊賀越乗掛合羽』(安永5年・1776初演)、大坂、中の芝居初演

歌舞伎には、西国順礼も多く見られる。この『伊賀越乗掛合羽』は、荒木又右衛門が助太刀をしたことでも知られる伊賀越の敵討を扱った作品である。〈九つ目〉(九幕目)には西国巡礼姿の人物が登場する。

ト花道より、豊松〔お種〕 笈摺、菅笠、杖、順礼の姿、太次郎〔巳之助〕を背に負ひ出る。後より樋五郎
〔お袖〕 同じく順礼の姿、杖、風呂敷包み少々負ひ、順礼歌にて出る。

豊松〔お種〕 四番に和泉の槇尾寺、深山路や檜原松原分け行かば、槇尾寺に駒ぞ勇むる。
(中略)

豊松〔お種〕 さればいナア、あなた方がお国を出なされて、今日か明日かと待てども待てども何の便りもなく、待つ日数は早いもの、月も替わり日も替わり、数えてみればもう一年のあまり。(中略) それで

私が身もあられず、せん方尽きてこの西国同行三人。

〈九つ目〉

このせりふの部分には、唐木政右衛門（実説の荒木又右衛門）の妻のお種と息子の巳之助が、渡辺志津馬（実説の渡辺数馬）の許嫁お袖とともに西国巡礼となって政右衛門たちを尋ね歩いたことが語られている（楳尾寺は西国三十三所第四番札所）。

絵づくしには巡礼姿が描かれていらないが、台帳のト書きには「笈摺、菅笠、杖、順礼の姿」とあり、これが西国順礼の身なりの定型とされていたことがわかる。

また、西国順礼は弘法大師との同行二人のはずのところを、自分たちが三人連れであることを「同行三人」と転じてせりふに用いている。

7、『金門五山桐』（安永7年・1778）4月、大坂、角の芝居初演

この作品の〈二つ目〉（二幕目）の南禅寺山門の場は、現代の歌舞伎でもしばしば上演される。登場人物や演出は初演時から現代に至るまであまり変わらず、短い場面ではあるが様式美が横溢していて、大物役者の顔合わせの演目となっている。

この道具段々せり上る。山門の下になる。菊五郎〔久吉〕早替り、木綿やつし、順礼のなりにて、笈摺を掛け笠を持ち、杓を頬杖にして、石段の敷瓦の上に、前なる草井戸へ目を付けている。この見えにて道具留まる。菊五郎〔久吉〕舞台先の草井戸の側へ行て、雛助〔五右衛門〕を写し見て、

菊〔久吉〕石川や浜の真砂は尽きるとも。

ト雛助〔五右衛門〕心得ぬと下を見て、

雛〔五右衛門〕何が何と。

菊〔久吉〕世に盜人の種は尽きまじ。

雛〔五右衛門〕うぬ。

ト小柄を手裏剣に打つ。菊五郎〔久吉〕杓にて受け留め、

菊〔久吉〕順礼に御報謝。

トきっと上を見上げる。雛助〔五右衛門〕袖にて顔隠す。よろしく

幕

南禅寺山門の上にいる盜賊石川五右衛門と巡礼姿の真柴久吉（羽柴秀吉を擬した登場人物名）が対面する場面である。台帳のト書きには、久吉の巡礼姿は「木綿やつし」（木綿の粗末な衣装）で「笈摺を掛け笠を持ち、杓」を所持していることが書かれている。絵づくしにもこの場面は描かれている【図7-1】【図7-2】。『金門五山桐』の絵入根本である『傾城浜真砂』にも、真柴久吉の巡礼姿が描かれている【図8】。

久吉の持つ「杓」は後に五右衛門に打ち込まれた手裏剣を受け止めるのに用いられ、その時に寄進を求める巡礼の定型句である「順礼に御報謝」がせりふとして発せられる。巡礼を芝居の趣向とした気の利いた演出である。

おわりに

江戸時代の職業図鑑である『人倫訓蒙図彙』（元禄3年・1690刊）「勧進舗部」には、〈似せ順礼〉という項目があり、「似せ順礼、後ろに三十三所と書き付け、順礼歌歌ひ勧進をするなり。およそ似せ順礼は、国所または月日を書かぬとかや。」とされている。同じく近世の風俗事典である『守貞謾稿』（天保8年・1837起稿）卷之七を見ると、〈西国順礼〉の項に「順礼は、三十三所の詠歌を唱へ唄ひて銭を乞ひ、杉形の菅笠に四句文等を書く。」とあり、〈六十六部〉の項には「西国順礼および六部には、実に参詣の者あり。あるいは三都とも乞丐人これに扮して出る者はなはだ多し。」とある。これらの巡礼に関する記述を合わせて考えると、元禄年間にはすでに偽物の巡礼が横行し、以後、物乞いの一つの形として黙認された形となっていたようである。

また、『守貞謾稿』卷之七には「芝居等これに扮する者は、幅一寸余、長さ四五寸の板数枚、上の方に穴を通し、紐を貫きて首に掛ける。これ三十三所への納牌なり。昔はこれを掛ける。今はこれを掛けず。ただ

芝居にするのみ。」ともあり、「納牌」（納札）を胸に掛ける巡礼姿は往古のものとなって、今は芝居にその形をとどめているだけであるという。

先に検討した歌舞伎にはさまざまな巡礼が描かれていたが、『人倫訓蒙図彙』や『守貞謾稿』の記事に見られる内容が実際に芝居に仕組まれていた場合が存在していた。歌舞伎の中の巡礼が実際の巡礼のありさまを忠実に反映しているかどうかは判断しがたいところがあるが、演劇関係の情報も巡礼に関わる資料の一つとして、考察の際には視野に入れるべきかと考えられる。

【図1】『四国辺路』絵入狂言本

「座本山下半左衛門口上」

舞台上の三人が巡礼姿



【図2】『けいせい在原寺』

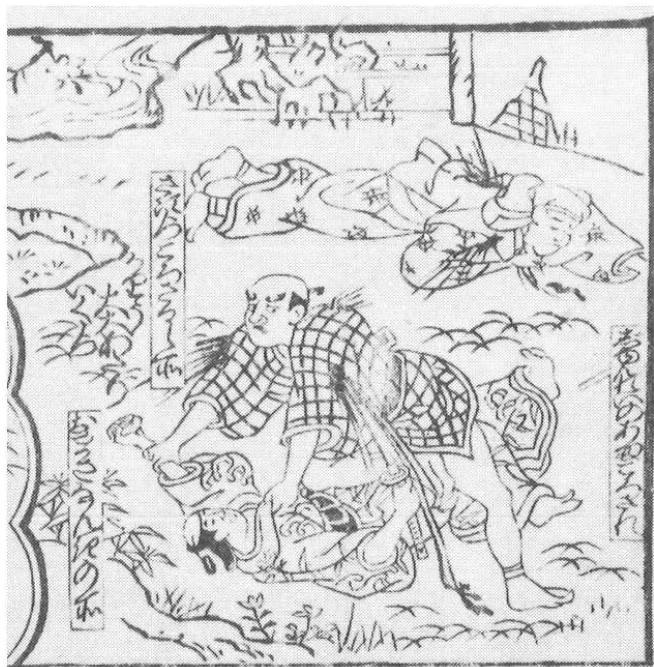
右側の三人が笈摺を着け納札を掛けた巡礼姿

中央の二人も笈摺を着けた巡礼姿



【図3】『けいせい錦産衣』絵入狂言本

上方に尼の巡礼が倒れている



【図4】『成相觀音縁起』絵入狂言本

左方の三人が巡礼姿

傍の黒い子牛も笈摺を掛けている



【図6】『竹籠太郎怪談記』絵づくし

真念庵の内部を描く



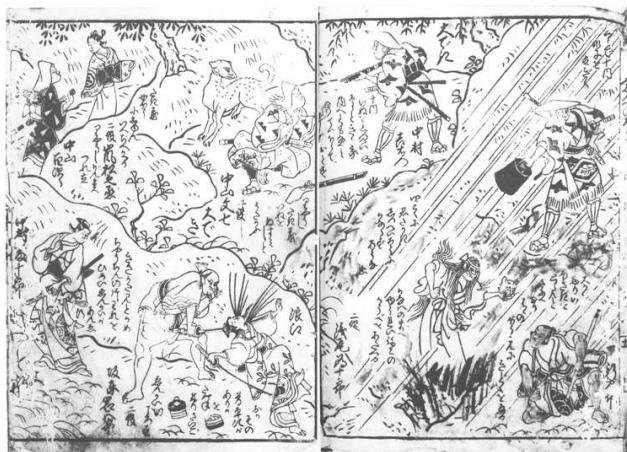
【図7-2】『金門五山桐』絵づくし

右上部分を拡大、久吉は巡礼姿



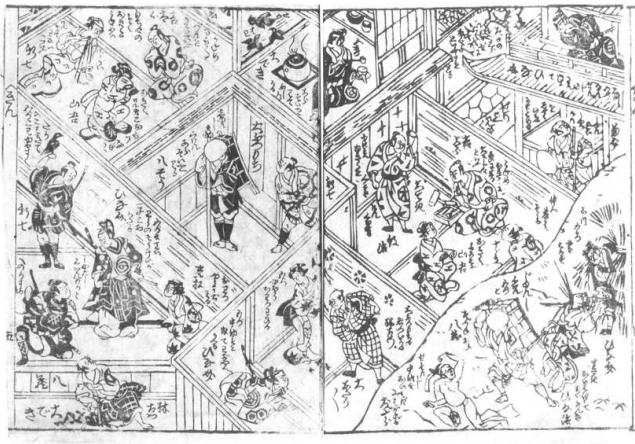
【図5】『竹籠太郎怪談記』絵づくし

嶮岨な四国の山中のありさま



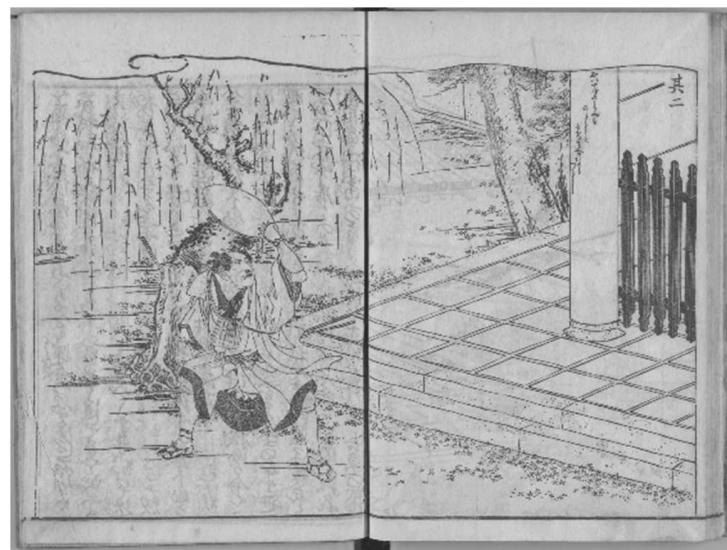
【図7-1】『金門五山桐』絵づくし

右上、山門の上の五右衛門と階下の久吉



【図8】『傾城浜真砂』(『金門五山桐』の絵入根本)

真柴久吉の巡礼姿



*絵入狂言本の引用は近世文藝叢刊5『絵入狂言本集 上』、近世文藝叢刊6『絵入狂言本集 下』、台帳の引用は『歌舞伎台帳集成』第十五巻、第三十四巻、第三十六巻による。ただし、通読の便を図って表記を一部改めた。挿絵についても上記による。